

奈良絵本・絵巻研究からの進展

慶應義塾大学 文学部 教授

石川 透

(お問い合わせ先) E-MAIL: toru@flet.keio.ac.jp



研究の背景

奈良絵本とは、室町時代後期から江戸時代中期にかけて制作された、手作り手彩色の豪華絵本です。代表的な作品としては、『浦島太郎』や『物くさ太郎』といった、今日でも知られている御伽草子のいろいろな作品があります。最近では、中高の教科書やマスコミにも登場するようになりましたが、なかなか総合的な研究は進みませんでした。その理由は、作品は多く残されているのですが、ほとんどの作品に作者の署名や記録がないからです。したがって、同じ作品を見ても、研究者によって千差万別の時代判定が出ていました。

そこで、多くの作品を網羅的に調査撮影し、まずは本文の筆跡による分類を試みました。ちょうど、「奈良絵本の基礎的研究」(基盤研究C、平成10～13年度)を始めた頃はデータ処理のデジタル化が始まった時期でしたので、パソコンでの比較研究により大量の作品群を処理することができました。

研究の成果

それ以降、「室町～江戸期における写本と版本の関係についての総合的研究」(基盤研究A、平成24～28年度)に至るまで、計6種類の科研費により、この分野の研究は格段に進み、さまざまなことが明らかになりました。特に、奈良絵本・絵巻の筆跡研究により、その制作者と制作年代、さらには制作地がかなりはっきりしてきました。特に、浅井了意の筆跡の発見は、版本の仮名草子作

家として著名な人物が、奈良絵本の詞書を制作していたことを示し、最初は奈良絵本などの写本の書写をしていた人物が、その過程で得た教養を元に大作家になって行く道が見えてきました。

また、奈良絵本・絵巻の文字と挿絵の両方を作成していた居初つなは、おそらく、日本初の女流絵本作家と言って良い存在であることが分かりました。奈良絵本・絵巻や版本は、男性職人である絵師や筆耕(文字を清書する人)などが分業で制作したと考えられていたもので、300年以上前のこの発見は驚きでした。しかも、居初つなの挿絵は、とてもかわいらしいのです。

今後の展望

このような成果を踏まえて、写本と版本の関係を探ると、一般的には、中世の写本の時代から近世の版本の時代に移行していった、と言われてはいますが、実際には、江戸時代前期は、浅井了意や居初つなのように、作り手自体が両方をこなしており、そこから新たな創作が生まれていった様子も見えてきました。まだまだ、奈良絵本から始まった研究がさまざまな分野に展開していく途中にいる状況です。

関連する科研費

2012-2016年度 基盤研究(A)「室町～江戸期における写本と版本の関係についての総合的研究」



浅井了意詞書筆絵巻



居初つな筆奈良絵本